

渡邊萬次郎賞第35回受賞者

青木 義和 名誉会員



青木義和名誉会員は、1962年に九州大学理学部地質学科を卒業された後、同大学院理学研究科修士課程在学中の1963年に九州大学の助手に就任され、以来とくに 記載鉱物学的研究、 鉱床の調査・研究、 結晶成長に関する研究において、我が国の鉱物学の発展に寄与されました。

記載鉱物学的研究では、2種の新鉱物「種山石」と「南部石」、および5種の日本新産鉱物の記載報告を行われました。このうち「種山石」は、マンガンケイ珪酸塩の新鉱物で、化学組成的にはハウイー石のマンガン置換体であり、マンガ鉄質チャートの変成作用、特に低温高压の変成作用に関する解釈を見直すことに貢献したとして、1987年度（昭和62年度）櫻井賞を受賞されました。

鉱床の調査・研究では、たとえば広島県三原鉱山において、デーナ石およびフェナス石といったベリリウム鉱物、すなわちデーナ石およびフェナス石で構成された世界的にも珍しいベリリウム鉱床が賦存することを見い出され、その形成過程を鉱物学的・地球化学的に考察されました。

結晶成長に関する研究においては、核形成と結晶形成の要因とその機構を明らかにすることを目指してという 考えのもとに、核形成に関する研究、結晶成長、特とくに単結晶の成長形や双晶の形態に関する理論的研究を進めてこられました。

青木名誉会員は、以上のような見地から鉱物学の発展に寄与されただけでなく、学術普及活動でも多大な貢献をされてこられました。旧文部省学術審議会や日本学術振興会の専門委員を務められたほか、旧日本鉱物学会では、評議員を4期、庶務幹事、行事幹事も1期ずつ務められ、さらに、1996年6月から1998年10月にかけては旧日本鉱物学会の会長として学会の発展に寄与されました。特に、鉱物学会と岩鉱学会の雑誌統合問題に尽力され、2000年に岩鉱誌と鉱物学会誌（鉱物学雑誌、Mineralogical Journal）との合併が成功裏になされました。

このように、青木義和名誉会員の長年にわたる鉱物学に関する研究業績、ならびに幅広い教育活動・普及研究及び学会活動への顕著な功績は渡邊萬次郎賞の授賞者としてふさわしいものと判断され、青木義和名誉会員を渡邊萬次郎賞に推薦するものであります。

青木義和名誉会員の略歴

1939年10月19日生まれ

1962年 3月 九州大学理学部地質学科卒業

1963年 3月 九州大学大学院理学研究科修士課程（地質学専攻）中途退学

1963年 4月 九州大学理学部助手（鉱物学）

1966年 9月 通産省工業技術院地質調査所技官

1971年 9月 九州大学理学部助手（鉱物学）

1972年 4月 通産省工業技術院地質調査所調査員併任（～1973年3月）

1978年 4月 九州大学理学部助教授（鉱物学）

1989年 9月 九州大学理学部教授（鉱物学）

1999年 4月 九州大学大学院理学研究院教授に配置換（地球惑星物質科学）

2003年 3月 九州大学大学院理学研究院教授 定年退職

2003年 3月 九州大学大学院理学研究院名誉教授